



# 読書歌壇

## 小池 光選

ゆるやかな坂道なのに息が切れ秋の扇風機のように寂しい  
横濱市 森 秀人

【評】秋の扇風機のような、という一個の比喩だけで成り立っている歌。比喩ひとつで、歌ひとつ。以前はこんな坂道なにごとでもなかったのに。老いは厳粛にして悲しい。  
壊れゆく脳持つ母は突然に仁王のような顔で怒りぬ  
西東京市 佐々木節子

【評】これは悲しい。突然、激情に駆られて怒り出す。その理由がわからない。わたしの母もそうであった。怒るうちはまだ元気があったと思う日が来る。それを待つしかない。  
福島県 黒沢 正行

【評】最近の若者は、程度の著しい出来事に出会つと「やばい」を連発する。新聞に載つたおじいちゃんに敬意を表しているのである。  
佐世保市 鴨川 富子

杖をつき「文藝春秋」買いに行く毎月十日の母のルーティン  
東京都 鈴木真理子

娘とは厄介なものの小津映画見つつ肯く齡となりぬ  
稲城市 山口 佳紀

本能をもちてオスミスそれぞれの役目果たせりヒトを除きて  
長野市 原田 浩生

アオサギが渡船見ている冬も海もつぐ船の出発の時  
鳴門市 楠井 花乃

白髪の息子も席をゆづられてしごもどろに礼を言ひをり  
岡山市 前原 和子

小さき手にランプの火屋を磨きしとふ母の生家は住む人もなし  
下関市 森 利治

## 栗木 京子選

武蔵野のひときわ高き椋の木の神の入口出口は何処  
朝霞市 橋本 友子

【評】寺山修司に「一本の樫の木やさしそのなかに血は立ったまま眠れるものを」という歌がある。木の内部には神秘的な世界が存在するに違いない。武蔵野、椋の木、神。三つのイメージが美しく結び合った一首。  
燃え盛るほのおの迫りたりし道二十九年経て寒木瓜の咲く  
神戸市 大浜 義弘

【評】一九九五年一月十七日に起きた阪神淡路大震災。あれから二十九年が経った。街を呑み込む炎の赤と、寒木瓜の花の赤。色彩を介して震災の記憶を印象的に描いている。  
八十四歳革手袋を新調す共に長持ちせんと願いて  
上尾市 清水 昇一

【評】新調した革手袋と同様に、いのちも「長持ちせん」と表したのが楽し気である。  
からすうり一つ残りにて藪にありこれが見納め春には宅地  
宇土市 三浦 清美

も  
蠟梅の「満月」ぼつと咲き始む宛先不明の手紙戻る日  
霧島市 内村としお

来春の椎茸の仕事に切り倒す機三本 株を残して  
水戸市 大野太加し

子に戻りつつある父を子のない我が必死で探すデブ地下  
大阪市 鷹取 真子

旧姓の筆名の短歌投稿す母さんがいつか忘れる前に  
広島市 工藤 昌子

農耕に牛馬使いし時の事故牛は横蹴り馬は後ろ蹴り  
今治市 竹田 貢

## 俵 万智選

母さんの刻も野菜はちいさくてあたしをちゃんともさせる  
横濱市 紺屋 小町

【評】何歳になっても母は母だし娘は娘。上の句からは、几帳面で子どもを細やかに気づかう母親が浮かぶ。「ちゃんと」にこもる思いの深さ。平仮名が子どもと連動した表現になっているところも効果的だ。  
我よりも早起きだった朝がもう我より寝坊になって極月  
東京都 武藤 義哉

【評】機知の冴える歌。日の出の時間の変化を「早起き」「寝坊」と捉えたところがユニークだ。つまり作者は定時起床なんですわ。「教わる」にひそむ「子」の字は窮屈で「学ぶ」にひそむ「子」は健やかで 上尾市 関根 裕治

【評】確かに！と発見にうなりつつ、教育や学びへの哲学というものまでも感じさせられる。  
マフラーをきつちり巻いて去り際の君の言葉を温めてゐる  
青梅市 諸井 末男

日常的とは アイロンに挟まれて髪は無言で煙を放つ  
さいたま市 中込 有美

誕生日に食べるケーキは誕生日に食べたケーキを思いださせる  
堺市 一條 智美

皿皿と皿皿皿と皿皿と卒寿の父と寿司皿を積む  
村上市 鈴木 正芳

果物に種があること知らぬ子ら今度は一緒にりんごむこうね  
横濱市 吉沢さくら

スケートの靴でリンクを飛び出すがごとく農道をゆくフェラーリ  
松原市 たりりずむ

いつぞやお世話になりと言われてもそのいつぞやは一体いつぞや  
守口市 小杉なんぎん

## 黒瀬 珂瀾選

変わったとあなたは嘆くふるさとを鑑賞会のように歩いて  
八王子市 吉村のぞみ

【評】久々の帰省で故郷の変化に驚く友人が親族が、珍しいものでも見るようなその視線に気づく。変わったのはふるさとを離れたこの人自身かも、と作者は感じたのだろうか。雪である理由は見ればわかるから夜中に海へ降つたらあかん  
枚方市 久保 哲也

【評】人の心は雪のようなものだから、貴方の心は私の知らないところで勝手に消えないで……という歌かと読みました。どうであれ美しい抒情と想像力を言葉にした一首です。  
亡き妻の名前で届く通販のハガキは四季の花のお知らせ  
兵庫県 若藤 成生

【評】連れ合いの死後に通販DMが届く。人の不在を思わせる寂しさと、花が好きだった故人の手柄を思い返すひと時の歌です。  
亡き夫も居たならと聴くノクターン秋保の宿のロビーに流れて  
宇都宮市 佐藤 順子

スーパリーのレジに列なす老夫婦に寄り合える歳月が見ゆ  
ふじみ野市 小林 久枝

柚子たわわかって我が家に飼われたる征きて帰らぬ馬の小屋跡  
前橋市 平林 始

少しづつ嫌ひなものの増えてゆく吾子の茶色き皿を洗へり  
金沢市 塩本 抄

ペルーより来た男は法面の草を巧みに刈りて行きたり  
日野市 那須 真治

やさしい人のやさしさが枯渇するまでに覚えねばならぬ仕事の手順  
大和郡山市 大津 穂波

苦しみに耐へがたき夜は独房に母の手紙を繰り返し読む  
山形市 新垣ちの

◇投稿規定◇ はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名(ふりがな)、電話番号を明記。◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103・8601、日本橋郵便局留、読書歌(俳)壇、〇〇先生(希望選者名)係または読書新聞オンラインから ◇毎週月曜日に掲載 右の影絵はほたて